

立正大学博物館 第2回特別展

釈迦の故郷

会期：平成16年10月25日(月)～11月27日(土)



立正大学博物館

2004

目次

・ごあいさつ	1
・釈迦の故郷	2
・四大仏跡とカピラ城	8
・アショーカ（阿育）王の石柱	9
・ティラウラコット遺跡	10
・ティラウラコット遺跡出土遺物	13
・ルンビニー遺跡	17

-
- (1) この図録は、2004（平成16）年10月25日（月）から11月27日（土）にかけて開催する特別展「釈迦の故郷」の展示図録として作成された。
 - (2) この図録の編集・作成は、館長の指示により上野恵司専門職員が担当した。
 - (3) 特別展開催にあたり（財）全日本仏教会が実施したルンビニー遺跡の発掘調査記録を同会の後援を得て展示した。
 - (4) 展示資料については、立正大学ネパール仏跡調査団、立正大学文学部考古学研究室の全面的な協力を得た。
 - (5) 特別展開催にあたって、特に参考にした文献は下記の通りである。
 - ・立正大学ネパール考古学調査報告第Ⅰ・Ⅱ冊『ティラウラコット』（1978・2000年）
 - ・中村瑞隆著『釈迦の故郷を探る―推定カピラ城跡の発掘―』（2000年）
 - ・（財）全日本仏教会『ルンビニー発掘調査報告』（近刊）

ごあいさつ

平成16年度秋季特別展として「釈迦の故郷」を開催いたします。

仏教の開祖・釈迦（B. C463～383、中村元博士説）は、ネパールのルンビニーで生誕され、カピラ城で青年時代を過ごされました。

その実像は、19世紀末から20世紀初頭にかけての考古学的調査によって四大仏跡をはじめ、釈迦関係の遺跡が明らかにされてきました。しかし、四門出遊の地として知られるカピラ城跡の所在地については諸説があり定まっていませんでした。

そこで立正大学は、1967～77年の10年間、中村瑞隆教授（元立正大学学長）を中心とする調査団をインド・ネパールに派遣し、カピラ城跡を探索しました。その結果、ネパールのティラウラコット遺跡こそカピラ城の有力候補遺跡と想定して発掘調査を実施しました。

発掘の結果、釈迦時代の多量の出土品を得ることに成功しました。また、あわせて、ティラウラコット遺跡が、城跡であったことを再確認し、規模・構造・年代などと出土品の時代観とをあわせて釈迦の故城であった可能性を明瞭にすることができました。

一方、(財)全日本仏教会では、ルンビニーの整備と顕彰を目的に、1993～2003年の10年間、その地を発掘しました。発掘の結果、釈尊生誕の地を示す「印石」（標識石）を検出することに成功しました。この未曾有の成果は明春に報告書が出版されます。

そこで、立正大学の調査団が発掘したティラウラコット遺跡（推定カピラ城跡）の出土品にあわせて、(財)全日本仏教会のルンビニー遺跡発掘の経過と成果を写真によって展覧いたします。

「釈迦の故郷」の息吹を感得して頂けますれば幸いです。

平成16年10月

立正大学博物館

館長 坂詰秀一

釈迦の故郷

坂詰 秀一

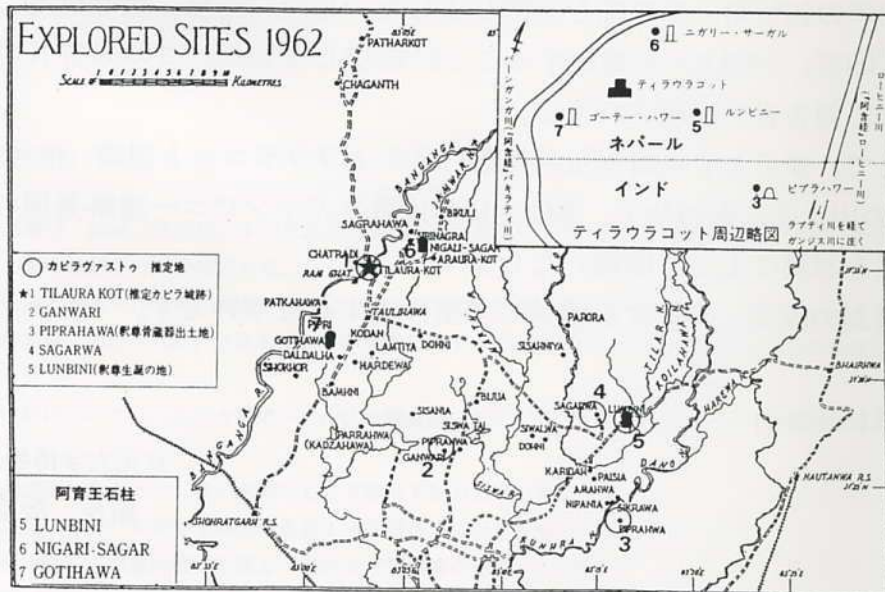
I

仏教の教祖・釈迦（前463～383年＝中村元博士説）は、現在のネパールに生まれ、インド北部の地を巡行して教を説いたと言われている。その釈迦が歴史上の人物として確定されたのは今から100年ほど以前のことであった。

19世紀の末、ネパールからインドの北方にかけて釈迦の実在を示す銘文が刻まれた資料（アショーカ<阿育>王石柱、舍利壺）があいついで発見された。このような歴史的史料の確認によって釈迦の生没年代をめぐる百家争鳴の感を呈するようになった。

釈迦の遺跡の探索は、玄奘三蔵（中国唐代の僧）の『大唐西域記』を手掛かりとしてA・カニンガム（インド考古調査局長官）によって着手された。彼は、インド各地、ネパールを踏査し、生誕の地ルンビニー、悟りの地ブッダガヤ、最初の説法の地サルナート、入滅の地クシーナガラ（の四大仏跡をはじめ、マガダ国の首都ラジギール（王舎城）、コーサラ国の首都シュラーヴァステイー（舎衛城）などを調査し、それぞれの所在地と実情を明らかにした。

他方、ネパールの南、インドと国境を接する釈迦の故郷ータライ地域では、イギリス・フランス・ドイツ・インド諸国の仏教学・考古学者らがルンビニー、シャカ族の本拠地カピラ城、釈迦の舍利壺が出土したピプラハワーなどにおいて競ってそれらの調査と研究に汗を流した。



タライにおけるカピラヴァストゥ関連遺跡の分布

(立正大学ネパール仏跡調査団 原図)

ルンビニーでは、アショーカ王の巡礼由来が刻まれた石柱によってその地が釈迦生誕の地と確認されたが、釈迦が29歳まで生活を過ごしていたカピラ城跡については明らかにすることができなかった。

このような釈迦の遺跡は、日本の僧侶にとって憧れの巡礼地であった。古くは平城天皇の第三王子高丘親王（真如）、そして明恵上人が「天竺（インド）」行きを渴望したことは歴史によく知られている。近代になって僧・北畠道龍は、1883年12月にブッダガヤに詣でた。道龍はその地を釈迦の墳墓と信じ「年を経て名のみ残りし伽耶の里に今日みほとけの痕を問ふ哉」と感涙し、「日本開闢以来余始詣于釋尊墓前 道龍 明治十六年十二月四日」と刻んだ石碑を建立した。

ついで、1895年1月には、僧・山崎辯榮がブッダガヤにいたり「よろづ世はまだ遠ければ今さらにふたたび照らせ仏陀伽耶の月」と詠んだ。辯榮は、さらにサールナート、クシーナガラ、サハート・マハートと巡礼の足を運んだ。

一方、シルクロード探検で知られる大谷光瑞などは、1902年12月からあくる1月にかけてブッダガヤとラジギールを調査し、ラジギールで法華経を説いたと伝えられる霊鷲山の確認に意をつくした。大谷の調査隊は、遺跡の現状を撮影し略測図を作成した。

また、梵文研修と仏跡探求を目指して1915年（大正4）年から3年間インドに留学した仏教学者（後、立正大学教授）の岡 教達は、カピラ城跡を求めてタイに赴き、諸説を検討して自説を発表した。

このようにヨーロッパ諸国の学者による釈迦遺跡の調査研究に対し、日本の学者も現地において調査を試みたのであった。

その後、第2次世界大戦を挟んで空白期があったが、1959（昭和34）年に京都大学がブッダガヤで発掘し、樋口隆康は、釈迦の遺跡に対し「日本人として最初の発掘であり、その意義は大きい」と感懐を披れきした。

ついで、'67年から10年間、未確定のカピラ城跡を求めてネパールのティラウラコットを発掘した立正大学、1986年以来、サハート・マハートの発掘と研究を続けている関西大学、1993年から10年にわたりルンビニーの発掘と調査を実施した（財）全日本仏教会は、それぞれ大きな成果を挙げた。とくに、ルンビニーの発掘は「印石」発見によって世界の関係学界より注目され、世界遺産登録の気運をつくりだしたのである。

II

ルンビニー、ブッダガヤ、サールナート、クシーナガラの4大仏跡をはじめ、釈迦に関する多くの遺跡が明らかにされてきたのに対し、出家の城—カピラ城の遺跡については定まっていない感があった。

かつて、カピラ城の伝承地を5世紀のはじめに訪れた法顕は、すでに荒れはてた城跡の故宮に釈迦の母の像、釈迦が病人と会ったと伝えられる東門などのほか、付近の伝説の個所に塔婆がたっていたことを書いている（『高僧法顕伝』）。

ついで、7世紀の中頃にカピラ城伝承地を詣でた玄奘は、カピラヴァストゥ国には十数の荒廃した城があり、王城には釈迦の父の像と母の像が置かれている建物や精舎などがあり、それらはレンガでつくられていたと記し、さらに、王城の付近には多くの伽藍の跡があり、王城に接して存在する一つの伽藍では3,000余人の僧が小乗の仏教を学んでいるほか、異教の人たちも住んでいたと描写している（『大唐西域記』）。

このようなカピラ城は、どこにあるのか、その探索が19世紀の後半からヨーロッパ諸国の学者の主導によって進められた。1896年にルンディにおいてA・フューラーが発見したアショーカ王（前3世紀マウリヤ朝第3代王）の石柱に刻まれた銘文によって、釈迦生誕の地が明らかにされた。ルンビニーが確定したのにもない、カピラ城の所在が課題となった。法顕と玄奘の記録をもとに付近一帯が調査され、西南約13kmのピプラハワー（インド）と西北約23kmのティラウラコット（ネパール）が注目された。ともにレンガを用いた廃墟が残されていた。

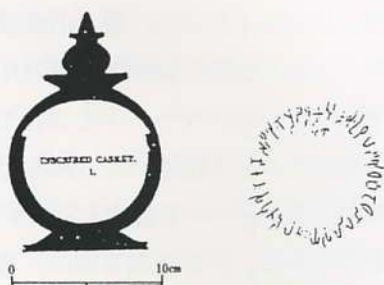
1898年にW・C・ペッペによってピプラハワーの塔婆遺跡が発掘され、石棺のなかから5個の舍利壺、多数の副葬品が検出された。その舍利壺の一つには銘文が刻まれていた。そこには「シャカ族出身の世尊ブツダの遺骨を納める」（中村元）と読まれていた。

さらに1899年には、V・スミスの指導によりP・C・ムカルジーが、ティラウラコットを発掘し、城塞遺跡であることを明らかにした。

その結果、ティラウラコットはカピラ城、ピプラハワーは釈迦の墳墓（塔婆）と考えられたが、一部には後者をカピラ城とする意見もあった。

カピラ城をめぐる問題は、1960年代の後半から70年代にかけて再び注目されるようになった。その端緒は、1967年から立正大学がネパール考古局とともに着手したティラウラコットの発掘によって高揚した。

調査は10余年間にわたって続けられ、マウリヤ朝（前318年頃～前180年頃）からクシャーナ朝（1～3世紀）、そしてグプタ期（320～550年頃）にかけて存在していた城塞遺跡であることが明確となった。



ピプラハワー出土の舍利壺

（P・C・ムカルジー原図）

東西約450m、南北約500mの南北に長軸をもつ城は、周囲にレンガの壁をめぐらし、東西南北に各1～2カ所の門を、城中には2つの池と8つの墳丘（建物跡）を有することが知られた。

とくに、釈迦の時代を示す北方黒色磨研土器の出土はカピラ城跡の比定地として有力であることを提示した。

この発掘に触発されて1971年からインド考古局のK・M・スリヴァスタヴァは、ピブラハワールの発掘に着手し、かつて、ペップが発掘した石棺の下方から二つの舍利壺を掘り出すとともに、付近の僧院跡からクシャーナ朝のシール（印章）40数点を発見した。

それには1～2世紀の文字で「この僧院はカニシカ王がカピラ城の僧団のためにたてた」「大カピラバスの比丘」などと刻まれていた。そこでピブラハワールはカピラ城跡とする見解が喧伝された。

しかし、出土遺跡が僧院、シールは1～2世紀のもので移動性に富む資料であり、かつ近くで発掘されたガンワリヤの遺跡も僧院であった。

それに対して、ティラウラコットは、パーナガンガ川（経典にみえるバギラティ川か）が西北に接して流れ、遺跡は大規模な城塞、出土資料に釈迦時代の土器などが確実に存在するなど、まさにカピラ城にふさわしい遺跡と言えることが明瞭となったのである。

インドの週刊誌『The Week』（2001・5・13）は、カピラ城問題の特集し、ティラウラコットこそカピラ城としての可能性が高いとの論調を掲げた。

III

7世紀の中頃、釈迦の生誕地ルンビニーを訪れた玄奘は、アショーカ王のたてた石柱があり、上に馬の像があったが後に落雷のため柱は折れ、倒れており、また、付近には沐浴する池がある、と伝えている。

19世紀の末、A・フューラーは、釈迦の故郷の旧跡を究明するため、ネパールのタライに至り、多くの知見をえたが、なかでも1896年にルンビニーにおいて発見したアショーカ王の石柱は、以降における調査と研究にとって重要な役割を果たすものであった。その石柱には、「天愛喜見王（アショーカ王）は、灌頂20年に、自らここに来て崇敬した。ここで仏陀釈迦牟尼が生誕されたからである。それで石柵を設営せしめ、石柱を建立せしめた。

（これは）ここで世尊が生誕されたことを（記念するためである）…」（塚本啓祥訳）と記されていた。この地が生誕地であることを証する史料となったのである。

ルンビニーの発掘は、1898年にP・C・ムカルジーによって実施された。彼は、石柱の南と北にトレンチ（溝）を掘り、東に隣接して建つマヤディビ堂の四周に鍬を入れ、さらに沐浴池の調査と全域の測量図を作成した。この報告は1899年に発掘したティラウラコッ

トの報告と共に一冊の報告書として1901年にインド考古局から出版された。

その後、1930年代に入ってJ・B・ラナは、ルンビニー全域の調査と整備を行った。マヤディビ堂の解体整備、沐浴地のレンガ化粧張りなどを施し、そのときの廃レンガで2つの円錐状の造形物をつくった。この作業中のある日（1933年12月）、現場を見学した仏教学者・平等通昭は「10万ルピーの予算」で「ネパール政府が調査と修復をしている」こと、「廃土で古の塔の想像的模型を作っている」と記した。この「塔の想像的模型」について、D・ミトラが「多くの巡礼者が周囲をまわって感銘するストゥーパ」になっている、と述べたことがある。

1967年、ルンビニーを訪れたウ・タント（当時・国連事務総長）の意をうけて「ルンビニー開発プロジェクト」が動きだし、13カ国からなる「ルンビニー開発委員会」が構成され、丹下健三の基本設計のもとに準備がはじめられた。

一方、1977年からネパール考古局のメンバーを動員して発掘にも着手した。その結果、石柱の北側にマウリヤ期の遺構の存在、マヤディビ堂の基礎は北方黒色磨研土器時代に遡ることなどが知られ、また、奉獻塔婆群の発掘、舍利壺（高さ約3cmの金製）、アショーカ石柱に伴う馬のたてがみの破片などが出土した。この発掘によってルンビニーは、マウリヤ期からグプタ期にかけての土器をはじめ、多くの遺物を出土することが明らかにされた。

1992年、ルンビニー開発トラストの意を承けて（財）全日本仏教会は、マヤ堂修復計画に着手し、その前提としてマヤ堂を解体し、その直下を発掘することになり、上坂悟（元立正大学講師）が担当者として現場に派遣された。発掘によってマヤ堂の中心部の直下から70cm×40cm（厚さ10cm）の「石」が発見された。「石」（印石・標識石とも表現されている）の発見は、アショーカ王が石柱建立の際、石柱の東方に設けられた堂的施設の下に釈迦生誕地を示す標識として埋置されたと考えられた。その時期について上坂は、遺構の状態、伴出土器からマウリヤ期と推定した。

石柱の刻文に「石柵を設営せしめ」と読まれている「石柵」の「中」こそ、発掘された「石」であった。（財）全日本仏教会のルンビニー発掘は大尾となり、有終の美を挙げたのである。

1896年、ドイツの学者による石柱の発見から100年目の1995年、日本の仏教徒と研究者によって「印石」が発見されたのである。

かくして、ユネスコは、1997年にルンビニー（ネパール）を世界遺産として登録した。

（『東京新聞』〈夕刊〉2004年6/29・7/6・7/13より転載）

釈迦関連遺跡調査等年表

前 463 年	カピラヴァストゥに生まれる
前 383 年	クシーナガラにて入滅（中村元博士説）
7 世紀中頃	玄奘、カピラ城伝承地を詣でる
1883 年 12 月	僧・北島道龍、ブッダガヤに詣でる
1895 年 1 月	僧・山崎辯龍、ブッダガヤ、サールナート、クシーナガラ、サハート、マハートと巡礼
1896 年	ルミンディにおいて、A・フューラーがアショーカ王の石柱を発見、釈迦生誕の地が明らかになる。
1898 年	W・C・ペップ、ピプラハワー遺跡を発掘
1899 年	V・スミスの指導により、P・C・ムカルジー、ティラウラコットを発掘、城塞遺跡であることを確認
1902 年 12 月 ～1903 年 1 月	大谷光瑞、ブッダガヤ、ラジギールを調査。遺跡の現状を撮影し略測図を作成
1915 年～1918 年	仏教学者・岡 教達、カピラ城跡を求めてタライに赴き、諸説を検討して自説を発表
1930 年代	J・B・ラナ、ルンビニー全域の調査と整備
1959 年	京都大学がブッダガヤで発掘
1967 年～1977 年	立正大学がカピラ城跡を求めてティラウラコット遺跡を発掘
1967 年	ウ・タント（当時の国連事務総長）の意をうけて「ルンビニー開発プロジェクト」動き出す
1971 年～	インド考古局のK・M・スリヴァスタヴァ、ピプラハワーの発掘に着手
1986 年～	関西大学、サハート・マハートの発掘と研究
1993～2003 年	（財）全日本仏教会、ルンビニー一の発掘と調査、「印石」を発見
1997 年	ルンビニー、世界遺産として登録
2001 年～5 月 13 日	インドの週刊誌『The Week』、カピラ城問題の特集

四大仏跡とカピラ城

釈迦の四大仏跡は、生誕の地ルンビニー（藍毘尼園）、悟りの地ブッダガヤ（仏陀伽耶）、最初の説法の地サールナート（鹿野苑）、入滅の地クシーナガラである。これ以外にも、調査によりマガタ国の首都ラジギール（王舎城）、コーサラ国のサヘート（祇園精舎）などが、明らかにされた。しかし、釈迦出家の城ーカピラ城（迦毘羅城）については明瞭ではなかった。

カピラ城については、5世紀・法顕の『高僧法顕伝』、7世紀・玄奘の『大唐西域記』に記述がみられ、ドイツ人フェラーはサーガルハワー説、日本人高橋順次郎・河口慧海はパリガワ説、インド人ムケルジーはティラウラコット説を唱えた。現地踏査を踏まえ、このティラウラコット＝カピラ城説に注目し、この地を発掘したのが立正大学ネパール考古学調査団である。



ルンビニー



ティラウラコットと四大仏跡



ブッダガヤ



サールナート



クシーナガラ

(坂詰秀一 撮影)

アショーカ (阿育) 王の石柱

アショーカ王 (前272~232) は、マウリア朝の第3代王でインドを統一した人物であり、その政治は武力から法 (ダルマ) へとかわれる。王は、即位後、北インドの要地や釈迦の遺跡に石柱を建立した。この石柱がアショーカ王の石柱と呼ばれている。これによって、当時認識されていた釈迦の遺跡が明らかになり、石柱の所在が釈迦関係の遺跡であることの証明にもなっている。

石柱は、チュナル産の黄灰色砂岩の一石で造られた円柱で、表面は研磨されている。全部で、30本ほどが報告されているが、現存するものは破片も含めて15例であり、その大きさは、7mと13m前後に二分される。ルンビニーの石柱は、銘文からアショーカ王の巡礼由来の地であり、ここが釈迦生誕の場所と確認された。



ルンビニー



ニガリ・サガル



ゴーチハワ

(立正大学ネパール考古学調査団 撮影)

ティラウラコット遺跡

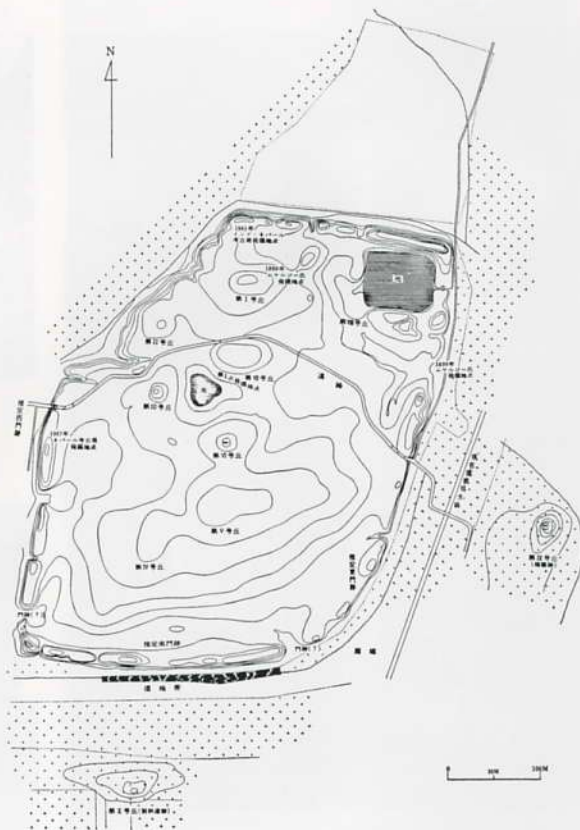
ティラウラコット遺跡は、ネパール王国ルンビニー州タウリハワーに位置する。当遺跡は釈迦が太子シッタルダとして青年時代を送り、やがて出家を決意したカピラ城比定遺跡の一つである。調査は、立正大学ネパール考古学調査団によって、1967年より1977年にかけて8次にわたって実施された。

調査の結果、遺跡は、東西約450m、南北約500mの南北に長軸をもつ長方形を呈する城塞遺跡であることが確認された。また、周囲にはレンガの塀と溝をめぐらし、東西南北に各1～2カ所の門、城中に2つの池、8つの建物跡を有することが明らかにされた。

検出された遺構は、建物跡、井戸、埋葬遺構などであり、建物跡が多く検出された第VII号丘においては、総数27軒が検出された。遺構は、①居住施設およびこれに付随する施設、②基壇状施設、③埋葬遺構、④井戸および貯水槽施設の4類に分類される。さらに①類は、その構成されている形状により、

- a) 1室により構成された建物、
- b) 数室により構成され、一部分に非居住空間を有して方形を呈する建物、c) 数室により構成され、直線状に配された建物、d) 数室が直線状に配され、その主軸方向の一面に前室及び前庭部を伴う建物、e) 居住空間としての機能は有しているが、全容が不明である建物、の5種類に細分できる。

調査された遺跡の時期は、先マウリヤ朝期・マウリヤ朝期(B.C. 4～2世紀)、シュンガ朝期(B.C. 2～1世紀・建物I期)、クシャーナ朝期(A.D. 1～3世紀・建物II・III・IV期)頃にわたっている。

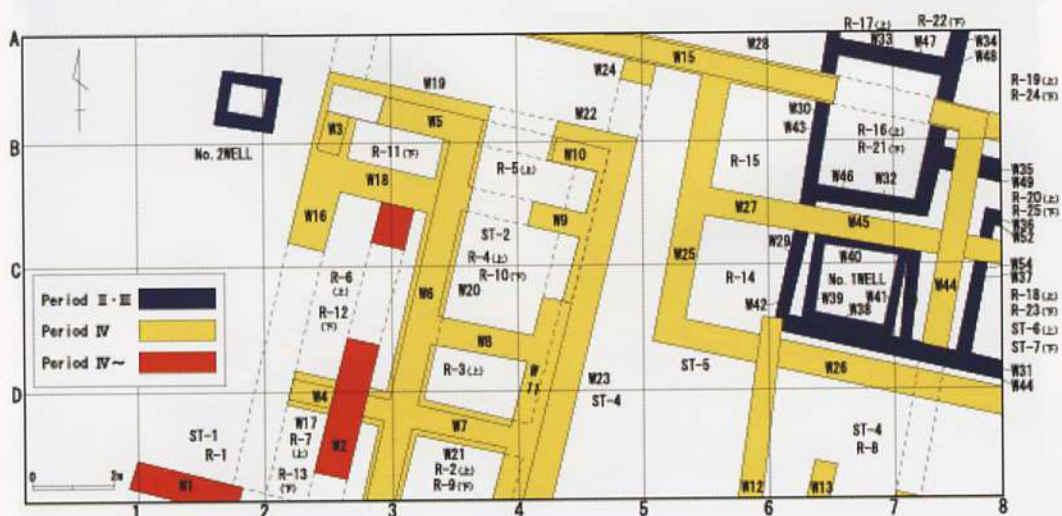


ティラウラコット実測図

(立正大学ネパール仏跡調査団 原図)



第七号丘検出遺構配置図



第二号丘遺構配置図



第Ⅶ号丘中央区域（南方より）



第Ⅱ号丘調査区全景（東方より）

ティラウラコット遺跡出土遺物

立正大学の調査は、第Ⅶ・Ⅱ号丘を中心に実施され、多くの土器・ティラコッタ・石製品・ガラス製品・銅製品・鉄製品・骨製品・コインなどが出土した。とくに、土器は、釈迦の時代を示す北方黒色磨研土器が含まれており、ティラウラコット遺跡がカピラ城跡の比定地として可能性が高いことを示している。



黒灰色皿形・碗形土器



黒灰色広口壺形土器



黒灰色鉢形・壺形土器



赤色碗形土器



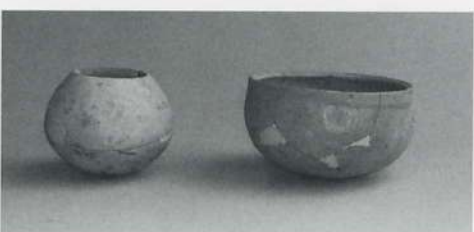
赤色鉢形土器



赤色蓋形土器



赤色小形土器



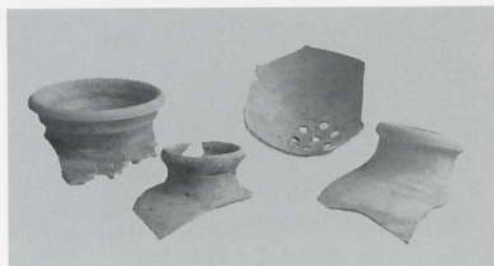
赤色碗形土器



赤色広口壺形土器



赤色広口壺形土器



赤色広口壺形・甌形土器



赤色片口付碗形土器



赤色鍋形土器



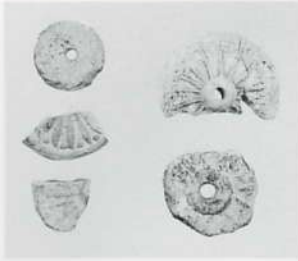
赤色壺形土器



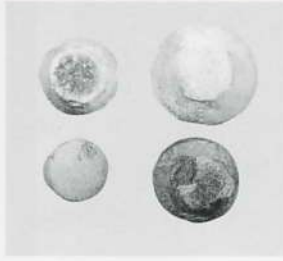
ティラコッタ



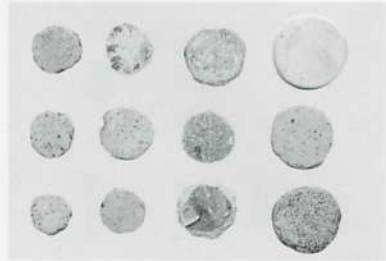
赤色長胴甕



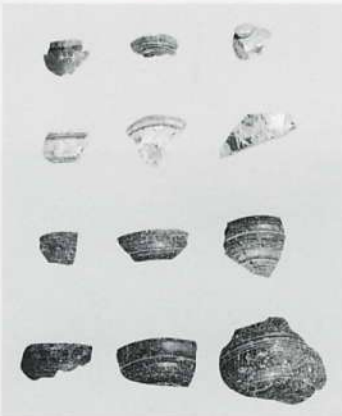
土製車輪



土製陶用当板



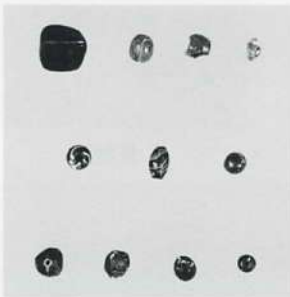
土製円盤



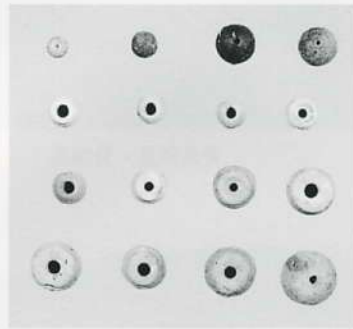
石製蓋・容器



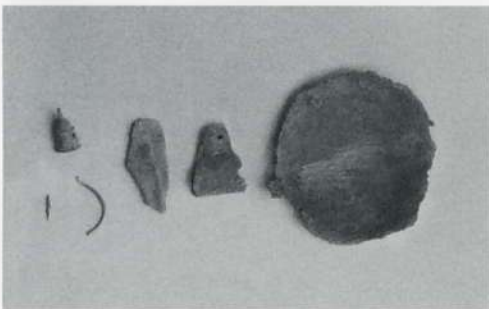
石製玉類



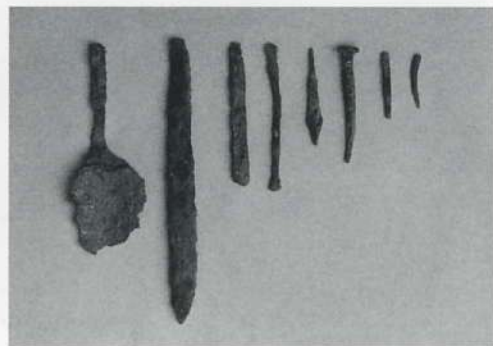
ガラス製玉類



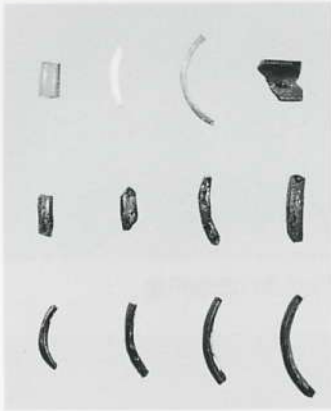
土製玉類



青銅製品



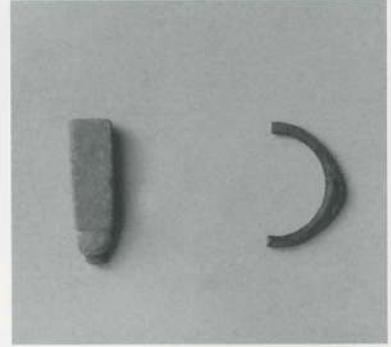
鉄製品



ガラス製腕輪

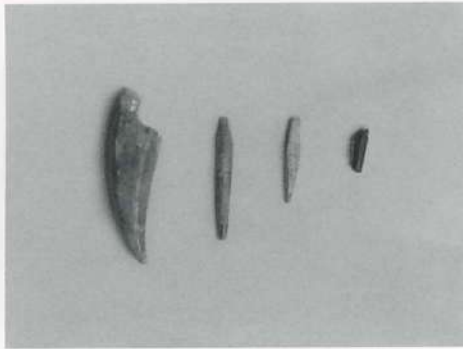


土製腕輪



石製品

石製指輪



骨角製品・骨製品



骨製鍬



マウリヤ期

シュンガ期

クシャーナ期

貨 銭

ルンビニー遺跡

ルンビニー遺跡は、ネパール王国ルンビニー州ルミンディに位置し、釈迦生誕の地として知られている。1896年にA・フューラーがアショーカ王石柱を発見、その記載銘文によって生誕の地と確認され、以降、何回かの小発掘が実施され、整備されてきた。(財)全日本仏教会は1993年から2003年にかけてルンビニーの整備のための発掘調査を実施した。その結果「印石」が検出され、1997年には世界遺産として登録された。発掘調査には(財)全日本仏教会より委嘱された上坂悟(立正大学大学院修了、元立正大学非常勤講師)があたった。



旧マヤ堂 (調査前)



旧マヤ堂 (漆喰除去後)

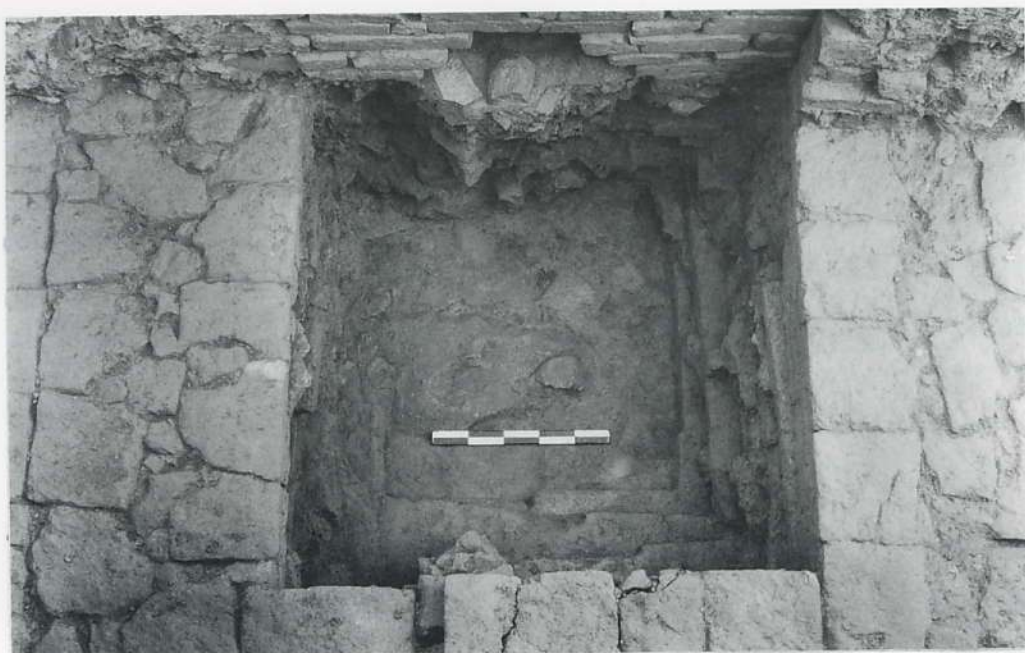


マヤ堂跡・調査状況 (南より)



マヤ堂跡・調査状況 (南西より)

(財)全日本仏教会 提供

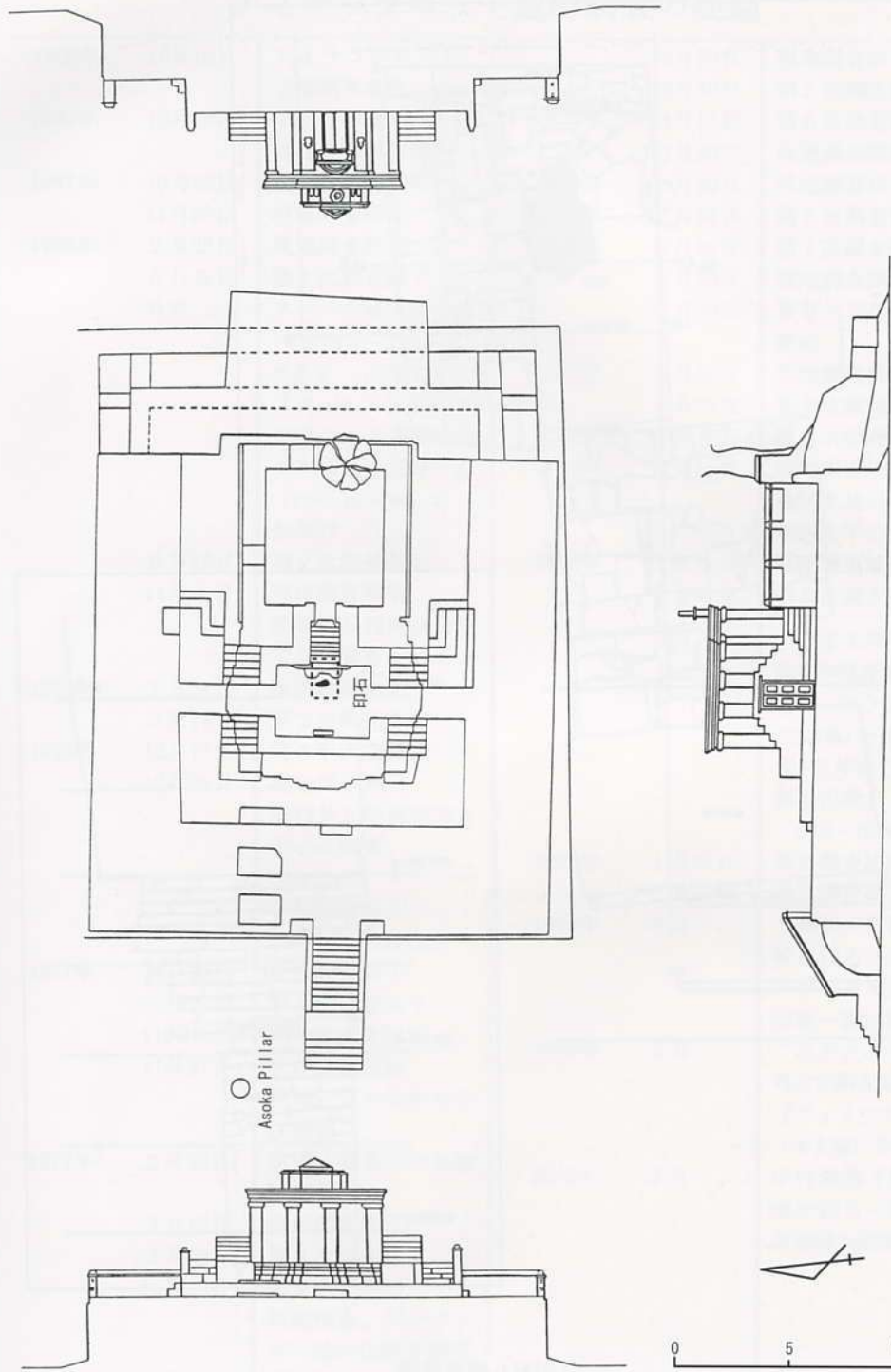


「印石」出土状況（1）



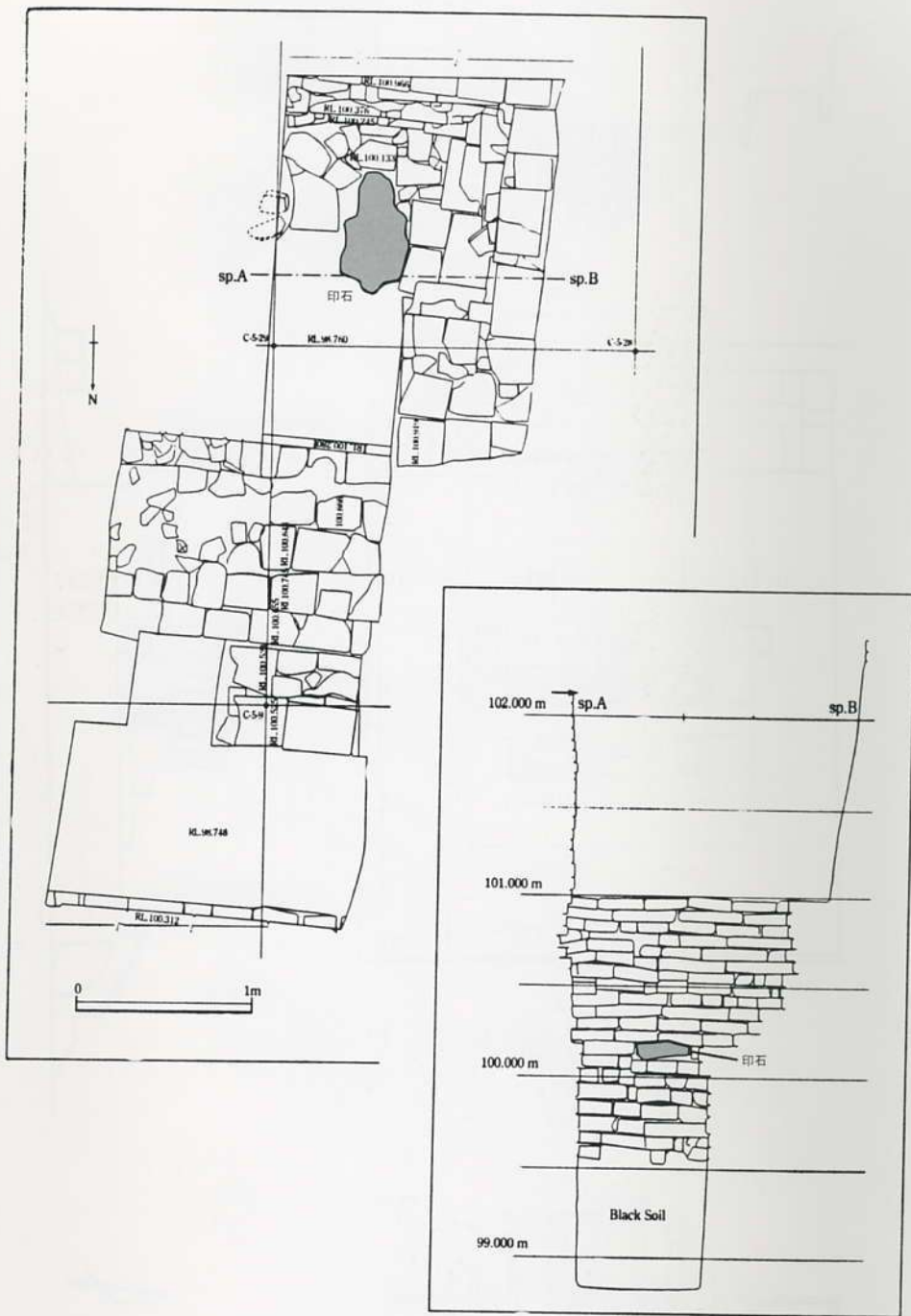
「印石」出土状況（2）

（（財）全日本仏教会 提供）



旧マヤ堂の平面・立面図と「印石」出土位置

(財) 全日本仏教会 原図)



「印石」存在状態

((財) 全日本仏教会 提供)

ティラウラコット遺跡調査の経過

1966年	12月18日	ティラウラコット、 予備調査実施		12月25日	現地調査終了
1967年	10月19日	ネパール政府との共 同調査契約が締結	1974年	11月13日	第5次調査終了
1967年	10月20日	第1次調査開始		11月26日	第6次調査開始
	11月20日	現地調査開始	1975年	2月20日	現地調査開始
1968年	2月25日	現地調査終了		2月24日	現地調査終了
	5月5日	第1次調査終了	1976年	11月30日	第6次調査終了
	6月	ネパール秘宝展開催 (6月29日～7月17日 於東京・小田急百貨店) 『ネパール王国チラ ウラコット遺跡—第 1次調査の記録—』 (1967.10～'68.2) を発行		12月10日	第7次調査開始
	9月12日	第2次調査開始	1976年	12月30日	現地調査開始
	11月1日	現地調査開始 第VII号丘西側部分を 中心に調査	1977年	3月10日	第II号丘の補足調査 開始
1969年	1月31日	現地調査終了		3月20日	現地調査終了
	2月11日	第2次調査終了		3月20日	第7次調査終了
1970年	12月13日	第3次調査開始		10月5日	第8次調査開始
	12月28日	現地調査開始 第VII号丘西側部分を 中心に調査 シュンガ、クシャー ナ王朝期のコパー・ コイン2253枚出土	1977年	11月15日	現地調査開始 遺跡北地区及び現地 周辺を中心に調査
1971年	2月20日	現地調査終了		3月4日	現地調査終了
	5月20日	第3次調査終了	1978年	3月6日	第8次調査終了
	11月6日	第4次調査開始		3月	“立正大学ネパール 考古学調査報告第II” 『ティラウラコット』 (図版編)を発行
	11月27日	現地調査開始 第VII・II号丘を中心 に調査			『TILAUURA KOT—発 掘の記録』 (1968～1978)を発行
1972年	2月20日	第VII・II号丘の発掘 終了	1980年	1月27日	補足調査開始
	3月12日	現地調査終了		2月24日	補足調査終了
	3月19日	第4次調査終了	1995年	6月	「釈迦の宮殿カピラ 城を探る—ティラウ ラコット発掘30年の 回顧—展」開催
	10月14日	補足調査開始 祇園精舎、デーヴァ ダハ城の仏跡を踏査	2000年	3月	“立正大学ネパール 考古学調査報告第I” 『ティラウラコット』 (本文編)を発行
1973年	1月5日	補足調査終了	2000年	7月	中村瑞隆『釈迦の故 城を探る—推定カピ ラ城跡の発掘』を発行
	12月8日	第5次調査開始			
	12月23日	現地調査開始			

(『ティラウラコット』Iより)

記念講演会

期 日：11月13日（土）

会 場：立正大学熊谷校舎1号館 1107教室

時 間：13：30～15：00

演 題

「釈迦の遺跡を掘る

＜カピラヴァストゥとルンビニー＞」

坂詰 秀一

（立正大学博物館館長・元立正大学学長）

第2回 特別展 釈迦の故郷

編集・発行 立正大学博物館
発行日 2004年10月25日
〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700
TEL:048-536-6150 FAX:048-536-6170
E-MAIL:museum@ris.ac.jp
